

初対面会話における話題内部の連鎖組織に関する日中対照

—意見要求/意見提示の連鎖を中心に—

呉 凌波 (名古屋大学院生)

1. はじめに

会話は相互行為である以上、定めた方向に進むわけではなく、参加者の言語行動で会話の流れが変わることもある。しかし、どのように会話の流れを変えていくかは文化によって認識された様式が異なる場合、それは異文化間コミュニケーションの場では障壁にもなり得る (大谷 2018)。会話スタイルの相違から生じる誤解を避けるために、文化間の共通点と相違点を明らかにする必要がある。本研究は、初対面会話における「話題の展開」に着目し、日本語と中国語の初対面会話における話題内部の展開構造を対照した上で、中国人日本語学習者が協調的に日本語の会話に参加するために提案したい。

2. 先行研究と本研究の課題

日常会話は、大小いくつかの単位的部分が連続して成り立っているのが普通であり、そのような単位的部分で話される内容——話題はいろいろであって、日常会話の内容的な面にはさまざまな話題の連鎖が見られるわけである (南 1981)。そこで、話題間の連鎖と話題内の連鎖という二つの視点を取ることができるが、本稿は話題内の連鎖に着目する。

2.1. 話題内部の展開構造

話題内部の展開様相を観察した張 (2018) は話段を単位に、日本語母語場面と日中接触場面における次元別の話段の出現傾向、次元別話段開始文における「情報要求系」の発話機能の出現傾向などを分析し、母語話者と学習者の各場面における会話参加の様相を明らかにした。学習者は母語話者の談話展開にリードされ、自ら積極的に「情報要求」しないと指摘された。しかし、質問の発話機能以外のものは観察されなかった。

楊 (2015) は、話題上の話し手・聞き手の役割交替の様相を分析し、中日母語場面の話題展開のパターン及び中日母語話者の話題上の聞き手としての会話の参加の仕方の相違について、日本語母語場面では、話題上の話し手と聞き手が比較的固定的であるのに対して、中国語母語場面では、会話参加者双方が話し手役割をめぐって交渉する場面も多くみられるという異なる特徴を明らかにした。しかし、話し手と聞き手の役割交替の様相に注目したが、発話機能レベルの分析までには行かなかった。協調的に会話参加するためには、いつ、どのような発話機能を使うかを学習者に提示する必要があると考える。

2.2. 雑談教育における指導項目のあり方

日常会話は談話という単位の連続からなるものであり、「言語の教育の最小単位は談話であって、文型ではない」(田中 1983) という主張に踏まえ、筒井 (2012:21) は、「日常の雑談は、内容的にも構造的にもまとまりのある単位からなること、したがって会話の教育においても、そのまとまりを単位として教えるべきであるということになる」と指摘し、また、日本語友人場面の雑談における 30 種類の連鎖組織の抽出と類型化によって、「どの

ような話題をどのような発話で開始するかによって、その後のやりとりの連鎖組織が決まり、必要な言語形式も決まることが明らかになった」と述べている。しかし、話題ごとの連鎖組織がどのように連続し、雑談を構成するかは課題として残され、また言語間では連鎖組織が異なる可能性もあることから、対照研究の重要性を筒井（2012）が述べている。

以上の先行研究を踏まえて、学習者のより良い会話参加を目指すためには、まず言語によって会話参加の仕方と各発話がコミュニケーション上における機能の相違を明らかにした上で、必要な教育項目と言語形式を検討すべきである。そこで、本研究は筒井（2012）で類型化された連鎖組織をもとに、日中両言語での連鎖組織のあり方を比較する。具体的には、以下2つの課題を設定した。

課題 1: 日中両言語の初対面会話に現れる話題の連鎖組織の共通点と相違点を明らかにする。

課題 2: 日中両言語の会話における連鎖組織を構成する発話のコミュニケーション上の機能の共通点と相違点を明らかにする。

3. 研究方法

会話への参加の仕方は会話参加者の上下関係や親疎関係に影響されやすいため、同性で学年の差が一年以内の学部生・大学院生（20代女性）の初対面会話を収集した。日本語母語話者（以下 JN）同士、中国語母語話者（以下 CN）同士の初対面会話を10ペアずつ（JJ01～JJ10、CC01～CC10）収集し、会話最初の16分間を分析対象とした。また、宇佐美（2019）を参考して文字化した。調査対象者の属性を以下の表1に示す。

表1 調査協力者の基本情報

	母語	平均年齢	所属
JN-JN	日本語	22.5	大学生 n=8/大学院生 n=12
CN-CN	中国語	22.8	大学生 n=6/大学院生 n=14

本研究は話題内部の展開構造を明らかにするために、分析単位を「話題」とし、分析単位ごとに連鎖組織を抽出する。話題内容変化の質的異なり基準（筒井 2012:39）を用いて話題を区分した上で、連鎖組織を抽出する作業を行った。連鎖組織の抽出に当たっては、連鎖組織の最も小さい単位の隣接ペア（＜質問－応答＞＜勧誘－承諾/拒否＞）を核に、その前後の拡張も含めた（勧誘する前に予定を確認する前方拡張、質問に応答が得られた後に評価がなされる後方拡張など）。

次に、筒井（2012）で類型化された連鎖組織をもとに、連鎖組織の第一発話のタイプを、「質問」「報告」「共有」に分類し、抽出した連鎖組織を「Ⅰ. 質問から始まる連鎖組織」「Ⅱ. 報告から始まる連鎖組織」「Ⅲ. 共有から始まる連鎖組織」に分類した。ⅠとⅡは会話参加者の一方が知識や経験を有する形で会話に参加する仕方であり、Ⅰは相手から得ようとするが、Ⅱは相手に情報を与えようとする。Ⅲは参加者双方が知識や経験を有するものとして会話に参加する仕方である。筆者が収集したデータから連鎖組織の第一発話の発話例を示す。

第一発話のタイプの下位分類と定義は筒井（2012）に準じた。

表 2 連鎖組織の第一発話のタイプ別の発話例

第一発話タイプ	定義	例
I. 質問	情報要求	事態や属性に関する情報を求める発話 ・え、出身こっちですか?。 ・那你之后是准备考研吗?。(じゃこの後は大学院を受けるつもりですか?。)
	語り要求	経験を語るよう求める発話 ・なんで[大学の名前]に来たんですか?。 ・<那>{>}你为什么确定,你为什么突然<想考研>{<}?。(じゃあ、なぜ決めたのですか、なぜ突然大学院に行きたいと思ったのですか?。)
	意見要求	思考や感情などを述べるよう求める発話 ・え、日本語ってなんか大変そうですね。 ・哎呀但是我的,你觉得那剧情怎么样?。(ああ、でも私の意見では、そのストーリーについてどう思いますか?。)
II. 報告	情報提供	事態や属性に関する情報を提供する発話 ・なんか、高校の友達が人文学。 ・我们下学期基本上就没有课。(うちは次の学期は、基本的に授業がありません。)
	語り	経験を語る発話 ・そう、だから、全然最初友達(え)いなくて、やばいみたいな、ほんと一人ぼっちなんだけどって思って、 ・然后, 额, 最主要的原因应该还是不是很喜欢当时的学校和当时的老师。(そして、うーん、主な理由はやはり当時の学校と先生があまり好きではなかったからです。)
	意見提示	思考や感情などを述べる発話 ・韓国めっちゃ行きたい。 ・那可以干其他的, 考虑一下公务员也很好。(じゃ他の仕事にしてもいい、公務員を考えた方がいいと思います。)
III. 共有	想起要求	相手に共有知識・共有経験を思い出してもらおうよう要求する発話 ・20、12月26とかでしたっけ、修論。 ・那以前我们还是一家呀(对, 对吧?。(じゃ以前私たちは一家族でしたね(そうですね)、そうでしょう?。)
	意見提示	思考や感情などを相手と共有のものとして述べる発話 ・卒論めっちゃ大変ですよ。 ・但是现在, 物理老师又。(でも今、物理の先生になるのもまた。)

また、話題の対象と内容も連鎖組織の構成部分を影響すると考えられる。そこで、本稿は①「会話参加者に関する話題」、②「第三者に関する話題」③「事柄に関する話題」¹に注目し、会話参加者または会話の現場にいない第三者についての「経験や現状、予定、習慣などの行動（事態・属性系）や、考えや感情（思考・感覚系）を話題とする連鎖組織」、また「一般的・抽象的な事柄などを話題とする連鎖組織」を分析する。

4. 分析結果

以下では前節の分類をもとに、日中両言語に現れた連鎖組織を比較する。まず、4.1 では全体的な出現状況を比較してから、4.2 では連鎖組織の構成部分を比較する。

¹ 筒井（2010:52）は話題の内容から「会話参加者に関することを話題とする連鎖組織」「第三者に関することを話題とする連鎖組織」「現場の物事に関することを話題とする連鎖組織」に分けている、

4.1. 連鎖組織の出現状況

連鎖組織の第一発話タイプから分類し、それぞれの出現数と出現頻度を算出した。以下表3の通り、両言語ともに「Ⅰ. 質問」から始まる連鎖が最も多く、次に「Ⅱ. 報告」から始まる連鎖、最後に「Ⅲ. 共有」から始まる連鎖は少ないが出現した。

表3 連鎖組織の出現状況

第一発話タイプ	JN	CN
Ⅰ. 質問	190 (65.5%)	142 (54.2%)
Ⅱ. 報告	88 (30.3%)	114 (43.5%)
Ⅲ. 共有	12 (4.1%)	6 (2.3%)
合計	290 (100.0%)	262 (100.0%)

このような出現状況に至る原因を考えると、初対面会話では相手に関する情報が少ないため、共有する知識・経験から連鎖を始めることが難しく、質問によって相手の情報を引き出すことが多いからである。しかし、何もかも質問の形で話題導入してよいは限らない。場合によっては、報告で自ら情報を提供することも円滑な会話展開につながる。また、JNとCNを比べると、JNは質問で話題展開することがより多く、CNは報告で話題展開することがより多い。

さらに、各種類の連鎖組織は何を話題の対象にするかによって分類した(表4)。出現率から見ると、「事柄」に関する話題では、JNは「Ⅰ. 質問」によって取り上げることが多く、CNは「Ⅱ. 報告」によって取り上げることが多いことが分かった。

表4 各種類連鎖組織の話題対象

話題となる対象		JN	CN
参加者	Ⅰ. 質問	110 (37.9%)	95 (36.3%)
	Ⅱ. 報告	38 (13.1%)	49 (18.7%)
	Ⅲ. 共有	0 (0.0%)	0 (0.0%)
第三者	Ⅰ. 質問	8 (2.8%)	4 (1.5%)
	Ⅱ. 報告	11 (3.8%)	15 (5.7%)
	Ⅲ. 共有	1 (0.3%)	0 (0.0%)
事柄	Ⅰ. 質問	72 (24.8%)	43 (16.4%)
	Ⅱ. 報告	39 (13.4%)	50 (19.1%)
	Ⅲ. 共有	11 (3.8%)	6 (2.3%)
合計		290 (100.0%)	262 (100.0%)

「事柄」を話題とした連鎖組織では、情報のやり取り以外にも、ある物事について、参加者が意見・考えを述べたり、要求したりする場合が多い。事実・属性について質問することとは異なり、相手の意見・考えを質問することは共通の考えを導き出し、関係を近づける機会でありながら、対立をはらむ危険性もある。本稿ではこういった「事柄」を話題とした[思考・感覚系]の連鎖組織([事実・属性系]は外す)について日中対照を行う。以下表5は、分析対象に当たる連鎖組織の出現数を示した。CNは意見提示(Ⅱ. 報告)をJNより多く行うが、共感を要請する意見提示(Ⅲ. 共有)は2例しかなかった。

表5 「事柄」を話題とした[思考・感覚系]の連鎖組織

第一発話タイプ	JN	CN
意見要求 (I. 質問)	5	5
意見提示 (II. 報告)	11	23
意見提示 (III. 共有)	9	2
合計	25	30

また、事柄に関する話題でも情報が不平等な場合があり、ある事柄についてどの参加者が情報を多く持つかによって意見要求・提示する方法も異なる可能性が大きい。そこで、話題の内容から話題領域を判断し、相手に情報があり自分に情報がない事柄を「相手領域」、自分に情報があり相手に情報がない事柄を「自分領域」、双方とも情報や知識がある事柄を「共通領域」とする。次節は話題領域別に、言語形式と連鎖組織の構成から比較する。

4.2. 「事柄」を話題とした[思考・感覚系]の連鎖組織の対照

意見・考えを提示する連鎖組織は、相手の属性や経験などに関する情報を得てから、それに関して相手の考えを引き出すや、前の話題と関連して自分の意見を提示する場合が多い。そのため、新しい話題ではなく前出の話題から発展される場合が多く、話題内容によって様々な連鎖組織が形成されると想定できる。表6では、領域別に連鎖組織の第一発話で出現される言語形式と、連鎖組織の構成部分をまとめた。

表6 領域別の連鎖組織のまとめ

第一発話タイプ	話題領域	JN	CN
意見要求 I. 質問	相手	「～でしょう」「～くないですか」 「～しない」「～そうですね」 <意見要求—意見提示—同意> <意見要求—不同意—根拠説明—同意>	「我觉得/感觉 (～と思います (けど))」「你觉得 (～と思います (か疑問詞省略))」 <意見要求—意見提示—(自らの) 評価—回避> <意見要求—不同意—根拠説明—回避>
	共通	「～じゃないですか」 <意見要求=意見提示—同意—根拠説明—評価>	「你觉得〇〇怎么样 (～についてどう思いますか)」 <意見要求—意見提示—根拠説明—根拠説明—同意> <意見要求—意見提示=助言—同意=受け入れ>
意見提示 II. 報告	自分	「でもなんか」 <意見提示—理解/評価—語り=共感>	「反正 (とにかく)」「因为 (～から)」「感觉 (～と感じます)」 <意見提示—語り=共感> <意見提示—助言—不同意>
	相手	「形容詞+そう」 <意見提示=意見要求—保留—根拠説明—納得>	「我觉得 (だと思います)」「说不定 (かもしれません)」「那可以 (それなら〇〇ができる)」 <意見提示=意見要求—不同意>
	共通	「でも確かに」「だったし」「いや」「かな」「かね」 <意見提示—同意—評価—共感>	「一般 (一般的に)」「但是毕竟 (でも結局)」 <意見提示—同意—根拠説明—同意>
意見提示 III. 共有	共通	「よね」「もんね」 <意見提示—同意>	「嘛 (ね)」

まず、相手領域の連鎖組織では、共通点として①応答者に応答を強いることを避けるためにそれぞれ異なる戦略が見られた、②断定を避ける表現の使用が見られた。一方、相違点として①CNは相手領域に直ちに踏み込み、助言さえすることがある、②JNは意見の対立を避ける傾向があり、不同意があっても最後に同意に達するが、CNは意見の対立を恐れずそれぞれ異なる意見を持っていても支障がない、③JNは不同意見を保留し、それぞれ別の面で相手に同意させるが、CNは不同意見を隠さず表明する。

次に、自分領域の連鎖組織では、共通点として①前の文脈との関連を表す接続詞を使いながら自分の意見提示することが多い、②自分の意見に共感する聞き手は類似の経験を語ることで共感を示す。一方、相違点として、①JNは類似経験を述べる前に理解や評価をする、CNは直ちに類似経験の提示で共感を表明する。

最後に、共通領域の連鎖組織では、共通点として①二番目の発話では同意に達する。一方、相違点として①JNは確認・共感を要請する表現を使うが、一方CNには少なく、客観的に意見陳述や意見要請することが多い、②CNはこれを情報獲得の機会をみなし助言を求めることがある。

5. 考察とまとめ

本研究は日中両言語の初対面会話に出現した連鎖組織の全体的出現状況を観察した上で、特に出現の形に相違が見られた「事柄」を話題とした[思考・感覚系]の連鎖組織を分析した。上記の分析結果のように、言語間で共通の特徴が検証された一方、日中両言語の会話にはそれぞれ独自の特徴が存在することがわかった。その相違点は、両言語の初対面会話における関与の仕方の相違からくるものであると考える。初対面関係では、JNは常に意見の対立を生じないように配慮し、理解や同意を表出することを通して協調的に関与を示す。一方、CNは共感を要請するより、対立を恐れず、議論や競争的な共感表出を好む。発話のコミュニケーション上の機能から見ると、類似経験の提示を通して共感を示すことが共通するが、相手の意見について一度理解を示すというステップはCNにとって必ず必要なものではない。異文化摩擦の一因になる可能性がある。

最後に、今後の課題として、他の種類の連鎖組織の分析、また接触場面における話題展開と会話参加の様相の分析などがある。

参考文献

- 張 未未. 2018. 「日本語母語場面と接触場面における雑談の話題展開の方法」、『早稲田日本語研究』27、25-36.
- 南 不二男. 1981. 「日常会話の話題の推移—松江テキストを資料として—」、『藤原与一先生古稀記念論集方言学論叢 I—方言研究の推進—』、87-112、三省堂.
- 大谷 麻美. 2018. 「日・英語の初対面会話における話題の連鎖と展開—共-選択の観点からの分析—」、『社会言語科学』21(1)、96-112.
- 田中望. 1983. 「日本語教育と談話の研究」、国立国語研究所『日本語教育指導参考書 11 談話の研究と教育 I』、113-133.

筒井 佐代. 2012. 『雑談の構造分析』、くろしお出版.

宇佐美 まゆみ. 2019. 「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2019 年改訂版」

(<https://isplad.jp/wordpress/wpcontent/uploads/2020/01/BTSJ2019.pdf>)

楊 虹. 2015. 「初対面会話における話題上の聞き手行動の日中比較」、『日本語教育』162、66-81.